

銅剣

銅鉾

尾道市の歴史と遺跡

縄文・弥生時代

特殊器台



土器

令和7年3月
尾道市教育委員会



①—1 縄文時代

縄文時代は、寒冷気候から温暖な気候に変化した時代です。人々は木の実や動物の肉・魚介類を食料とするため狩りや漁を行い、地面を掘って建てた竪穴住居で暮らしていました。当時の人々が食べ終わった貝類や魚の骨などを捨てた跡は、のちに『貝塚』となりました。

縄文土器は土をこねて形を作り、焼き固めた容器です。土器の発明によって木の実など食べ物の煮炊きや保存が可能となり、人々の食生活はそれまでと比べて大きく変わりました。土器の表面に縄目の文様が付いていることから『縄文土器』と呼ばれ、土器の名前をとって、この時代を『縄文時代』と呼んでいます。



▲写真 1：縄文時代の土器（太田貝塚）

①—2 おお た かい づか 太田貝塚（広島県史跡）

尾道市高須町にある太田貝塚は、縄文時代中期～後期（5000 年前～ 3000 年前）の遺跡です。遺跡の中心は縄文時代中期～後期ですが、太田貝塚からは、市内最大の縄文時代草創期（13000 年前頃）の槍先形尖頭器と有舌尖頭器が採集されていて、かなり古い時代からの活動が認められます。

太田貝塚からは、多くの縄文土器や石器、動物・魚の骨、貝類が出土しています。写真 1 の土器は、縄文時代中期～後期の土器で、食物や水の煮沸に使用されたと考えられる深鉢です。この他に矢の先端に使用された石^{せきぞく}鏃や皮をなめす道具として使用されたスクレイパー、食物を磨りつぶす^{すりいし}磨石と石皿などの石器や、動物の骨を利用した骨角器などが出土しています。また、太田貝塚の大きな特徴として、大正時代の発掘調査で約 70 体の人骨が発見されています。



▲写真 2：左) 槍先形尖頭器 右) 有舌尖頭器



▲写真 3：太田貝塚（高須町）

①—3

おお はま ひろ はた 大浜広畠遺跡

大浜広畠遺跡は、因島北東部の丘陵から派生した緩斜面地に位置しています。この場所では、古くから縄文土器や古墳時代の須恵器が採集されていて、周辺一帯に縄文土器の包含地と弥生～古墳時代の遺跡があると考えられていました。

1960(昭和35)年には、因島市教育委員会により、隣接する倉谷遺跡の調査が行われ、縄文時代晩期の土器や土師器、須恵器が出土しています。

1965～1966(昭和40～41)年には、因島市教育委員会から委託を受け、広島大学考古学研究室による大浜広畠遺跡の発掘調査が行われ、縄文早期から晩期の土器、土師器、須恵器、製塩土器、土錘などが出土しています。石器は、サヌカイト製の石鏃とスクレイパーが出土しています。



▲写真4：大浜広畠遺跡 縄文土器



▲写真5：大浜広畠遺跡 遠景

①—4

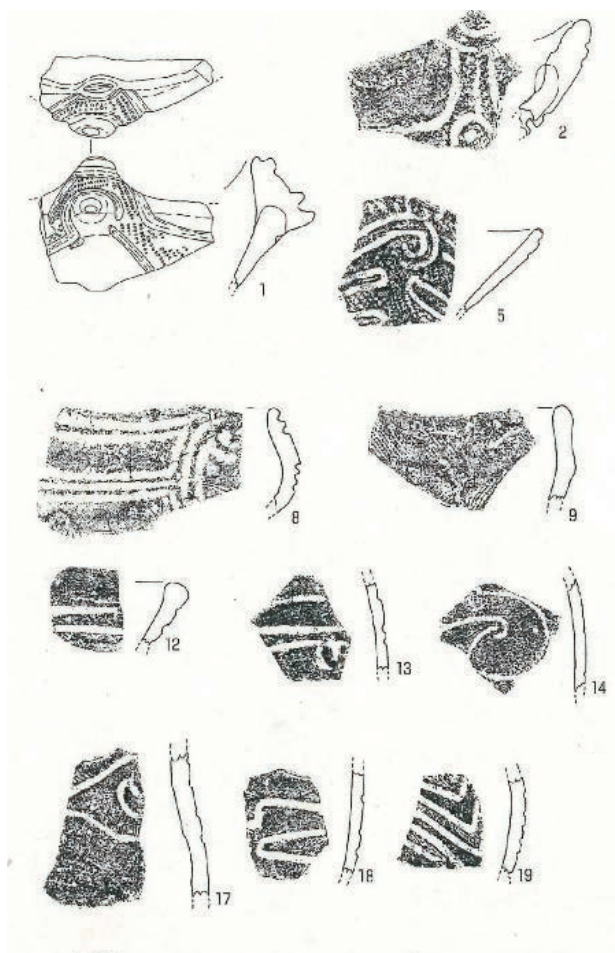
そ がわ 曾川1号遺跡

曾川1号遺跡は、御調町の尾道北に近く、御調川右岸の丘陵麓の緩斜面地に位置しています。遺跡は中国横断自動車道尾道松江線（中国やまなみ海道）の建設事業に伴い、2003(平成15)年から調査が行われました。同じ曾川1号遺跡からは弥生時代の集落跡が見つかり、また周辺には中世の城跡である牛の皮城跡などがあります。

遺跡からは、生活等が分かる遺構はあまり見つかっていませんが、縄文時代後期中津式や福田KⅡ式などの土器や石器が出土しています。



▲写真6：曾川1号遺跡 遠景



▲曾川1号遺跡 出土遺物実測図 抜粋

②—1 弥生時代

弥生時代の集落遺跡は、市内でも多数見つかっており、御調町高尾2号遺跡のような丘陵上の高地性集落や、御調町曾川1号遺跡、木ノ庄町市原2号遺跡、高須町天満原遺跡（写真7）、瀬戸田町神峠遺跡などの小規模な集落があります。集落遺跡は、人々が生活していた場所であり、竪穴住居跡や倉庫の跡、地面に掘られた貯蔵用の穴などが発見されています。中には写真8のように、同じ場所に何度も作り直された痕跡をもつ竪穴住居跡もあり、定住していた証拠でもあります。尾道市内にある弥生集落は、写真9のような河川に近く、丘陵から派生した緩やかな斜面地に造られることが多く、当時の人々が水と、住居や水田に必要な平地を求めていたことが分かります。

竪穴住居跡は、円形に地面を掘った周囲に排水用の溝を掘り、2～10本の柱を建てる穴が掘られています。柱に使用された木材や屋根に使われた茅などの植物は、酸性土壌のため、溶けてなくなっていますが、写真8のような地面に残る痕跡で、人々が生活していた住居跡が確認できます。このように地面を掘ることで、住居の中の温度は一定に保ちやすく、生活に適したものとなります。この他に土器に食物などを入れて貯蔵しておく穴もよく見られます。

このように、弥生時代の人々は定住に適した場所で、竪穴住居を作り、稲作などの農耕生活を送っていたようです。そして、複数の竪穴住居が集まってムラとなり、近隣のムラと様々な交流をしながら、徐々に大きく発展したのでしょう。交流の証拠として、他地域の土器が発見されています。こうした物々交換などの交流により、他地域の文化も取り入れた弥生集落が生まれたのです。



▲写真7：天満原遺跡



▲写真8：曾川1号遺跡 竪穴住居跡



▲写真9：曾川1号遺跡 遠景



▲写真10：神峠遺跡 遠景

②ー2 ^{そ がわ} 曾川1号遺跡(弥生集落)

御調町の曾川1号遺跡からは、縄文土器以外にも弥生時代から古墳時代の集落跡も確認されています。

弥生時代中期頃(2100年前～1900年前)から集落がはじまり、古墳時代前半(1800年前～1700年前)まで続いています。複数の竪穴住居跡が確認され(写真12)、小規模な集落が形成されていたことが分かります。写真11は、弥生土器がまとまって廃棄されていた土坑で、弥生土器の壺、甕^{かめ}、鉢^{たかつき}、高杯など様々な種類が出土しています。曾川1号遺跡の集落の最盛期は、弥生時代後期～古墳時代初頭(1900年前～1700年前)です。



▲写真11：貯蔵穴から出土した土器



▲写真12：曾川1号遺跡

②ー3 ^{たか お} 高尾2号遺跡

高尾2号遺跡は、近接する高尾1号遺跡と共に、1970(昭和45)年、御調中学校敷地造成工事中に発見されました。出土した遺物などから弥生時代後期の遺跡だと考えられています。遺跡は山田川と御調川とが合流する丘陵地の北西側に位置し、御調中心部への眺望が良い南向き緩斜面、標高170m付近に立地します。高尾台地の緩斜面を削り、平坦地を造成して小規模な集落を構築していました。

出土した土器の多くは弥生土器で、壺、甕^{かめ}、鉢^{たかつき}、高杯の4種が確認されています。これらは弥生時代後期の備後南部地域の特徴をもっており、地元で製作された土器(在地土器)であると言えます。同時に、吉備南部、山陰、近畿地方の特徴を持った土器も複数見つかり、当遺跡がこれらの周辺地域と交流を持ちながら発展していった様子が伺えます。



▲写真13：高尾2号遺跡 発掘作業風景



▲写真14：高尾2号遺跡

③ 弥生時代の集落と出土遺物

弥生時代の土器には、穀物や水などを貯蔵する壺、米を炊いたり湯を沸かす甕、食事の時などに使用する高坏や鉢、祭祀などに使用される器台があります。縄文土器と同様に、時期や地域によって、様々な形や文様があり、それが土器の年代を決める大きな要素となります。

右の写真は、市原2号遺跡と天満原遺跡から出土した弥生時代中期～後期に属する土器で、前期の土器に比べて文様が簡素化され、形状も変化します。

弥生時代後期になると、他の地域から搬入された土器が見られるようになります。写真16は、山陰地方から多く出土する土器で、備後地方在来の土器と一緒に出土していることから、交流によってもたらされた土器であると考えられます。

写真17は神峠遺跡から出土した石器で、特に長細い大型の石槍は、瀬戸内海中部などで出土例があり、生口島でも出土したことは、重要な意味をもつと言えるでしょう。



▲写真15：尾道市内の弥生土器
(市原2号遺跡と天満原遺跡)



▲写真16：曾川1号遺跡の弥生土器
(広島県立埋蔵文化財センター所蔵)



▲写真17：神峠遺跡出土石器
(広島県立埋蔵文化財センター所蔵)

④—1

弥生時代の祭りと祈り

貝ヶ原遺跡

特殊器台形土器は、弥生時代中期～後期にかけて、吉備地方(現在の岡山県)を中心に、墳丘墓でその多くが発見されています。華麗な文様や赤い顔料が施された装飾性が特徴的です。サイズも大きく、日常的に使用するには不向きな事や、その装飾性から「特殊器台」と命名されています。

写真の特殊器台は、御調町の貝ヶ原遺跡から出土したもので、上部の受け台部分が破損している他は破損箇所はなく、特殊器台の分布での南西端に位置しているなど重要であるとして、広島県重要文化財に指定されています。表面には、赤色顔料が塗られ、斜めの線により様々な文様が描かれ、長方形の透かし穴が彫られています。この非常に美しい土器は、墓に埋葬する際の儀式や祈りに使用されたと考えられます。



▲写真 18：貝ヶ原遺跡 遠景



▲写真 19：特殊器台(貝ヶ原遺跡)

④—2

おお みね やま

大峰山遺跡

弥生時代は、土器や石器の他に金属器が登場する時代でもあります。朝鮮半島を経由して、大陸から渡来した金属器には、青銅器と鉄器があります。青銅器には、弥生時代を代表する銅鐸や銅剣があり、島根県神庭荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡のように多数の青銅器が出土する場合があります。

尾道市内でも久山田町大峰山遺跡から弥生時代の銅剣2本、銅鉾1本が出土しています。

これらは武器ですが、大峰山の巨岩の下から発見されたため、祭祀などに使用された可能性が考えられます。この青銅器の近くからは、弥生時代後期初頭の土器も発見されており、その頃に埋納されたようです。この銅剣や銅鉾は弥生時代の尾道を物語る貴重な文化財です。



▲写真 20：銅剣・銅鉾(久山田町大峰山遺跡出土)(広島県立歴史博物館展示)

⑤ 尾道市内 遺跡マップ(縄文～弥生時代)

【赤色立体地図】

地形の凹凸や傾斜量を「赤色の彩度と明度」で表します。立体的に地形状況が把握できるため、火山地形の研究、遺跡や古墳調査、登山地図など幅広く活用されています。国土地理院のホームページから閲覧ができます。

※中国管内航空レーザー測量業務平 25 中公第 92 号及び広島県航空レーザー測量結果を使用

